

大学発マイクロ波論文特集の発行にあたって



大学発マイクロ波論文特集編集委員会

委員長 伊東 健治

2004年12月号よりはじまったマイクロ波論文（大学発）特集は既に10回の刊行を終え、本号で11回目の発行となる。この間、招待論文14編、論文99編を含む137編の技術論文を出版している。まさに日本の大学におけるマイクロ波研究を俯瞰的に捉えることができる素晴らしい実績をあげている。尽力された歴代の編集委員長、編集委員、執筆者、そして事務担当の各位に敬意を表したいと思う。

通信技術分野の技術者として、最も強い印象を与えた最近のニュースの1つに、通信機器の輸入超過がある。2000年代のはじめ、一般の携帯電話が初めてIP網に接続されてから、最近の高機能なスマートホンに進化する過程で、携帯電話機の寡占化が進んだ。そして海外製高機能端末が高シェアを占めるようになった。携帯電話に限らず、多くの通信機器でそのような事態となっている。そのため企業における通信分野での研究活動が縮退しつつある。本学会においても、企業からの投稿件数が減少傾向にある。そのようななか、大学における基礎的な研究活動を維持・発展させることは、日本の技術を維持し、発展させるために重要な意味をもつことはいままでもない。

しかし、この10年における「マイクロ波論文（大学発）特集」における掲載件数は残念ながら漸減している。本特集に限らず、和文論文誌が抱える問題であろうかと思われる。世界に向けて研究開発成果を問う場合、執筆言語の選択は深刻なジレンマがある。今回の特集を編集するにあたり、自研究室からも投稿を行う

と同時に、編集委員の皆さん、更に当分野の研究者の皆さんに投稿のお願いをした。その過程で、和文論文誌に執筆する価値について改めて考えた。技術者・研究者が行う論理思考を結実させたものが論文の出版である。執筆・査読を通じ、一貫した論理や質を維持し論文を完成させる教育的効果は絶大である。執筆言語の敷居が低い和文論文誌を大いに活用し、若い研究者、技術者の育成を図る、という当たり前のことの重要性を改めて痛感した次第である。本特集の企画、編集にあたっては、そのような議論のもと、全26編の投稿を得ることができ、厳正な査読の結果16編の論文・ショートノートに掲載することとなった。

刊行にあたり関係各位へ御礼を申し上げるとともに、今後、本学会における論文発表の更なる増加を願ってやまない。

(平成26年11月13日公開)

伊東 健治 (正員) 昭58同志社大・工・電子卒。平9東北大学工学研究科・電子工学専攻・後期博士課程修了。昭58三菱電機(株)に入社。衛星通信地球局、衛星搭載中継器、レーダ装置などに用いられるマイクロ波・ミリ波送受信機の研究・開発、RF-IC、携帯電話機の開発に従事。同社モバイルターミナル製作所・ハードウェア技術部長を経て、平21金沢工大教授。平12、平17関東地方発表明彰奨励賞、平18近畿地方発表明彰奨励賞、平14第50回オーム技術賞など受賞。平16～平20 IEEE Trans. MTTのAssociate Editor, 平18～平20, 平22, 平24～現在 IEEE MTT-S elected ADCOM member. 平20～平23 URSIC委員長。著書「モバイル通信の無線回路技術」(電子情報通信学会, 共著)。IEEE Senior member. 博士(工学)

大学発マイクロ波論文特集編集委員会

委員 幹事 委員	長事員	伊東健治	田原志浩	榎田洋太郎	加屋野博幸	藤島実	大平昌敬	川島宗也	岡部寛	津留正臣	鴨田浩和	平岡隆晴
----------------	-----	------	------	-------	-------	-----	------	------	-----	------	------	------